

# 広島大学人間生活系コースにおける 家庭科教員養成カリキュラムの検討

— 衣・食・住生活概論の構想と成果 —

鈴木明子・金崎 悠・村上かおり・富永美穂子・松原主典  
高田 宏・今川真治・梶山曜子・平田道憲<sup>1</sup>  
(2020年10月5日受理)

Examination of Home Economics Teacher Training Curriculum in Human Life Sciences  
Education of Hiroshima University

— Concepts and results of introduction to clothing, dietary, and living life —

Akiko Suzuki, Yu Kanasaki, Kaori Murakami, Mihoko Tominaga, Kiminori Matsubara,  
Hiroshi Takata, Shinji Imakawa, Yoko Kajiyama and Michinori Hirata<sup>1</sup>

**Abstract:** In order to reconceptualize the curriculum for home economics teacher training in the Department of Human Life Sciences Education of the Faculty of Education, Hiroshima University, we created and presented a new set of major subjects in the revised curriculum from 2019. As part of this study, we presented the concepts of “Introduction to Clothing Life”, “Introduction to Dietary Life”, and “Introduction to Living Life,” with background sciences and academic disciplines relevant to the three introductions, to the first semester students in 2020. In addition, we analyzed the changes in the views of students concerning life and the three subjects before and after taking each introduction through questionnaires. On the base of these results and the issues highlighted by the faculty members, we improved each introduction. After taking the introductions, the students came to possess the knowledge and skills required to solve their daily life and social problems related to clothing, diet, and living. This is because we have included in the subjects “performance task” to encourage independent learning, and group activities and practical tasks to broaden and deepen students’ awareness and understanding of the issues in their life and society. In addition, the conceptual diagrams with the structure of background sciences, showing the relationship between home economics and other sciences, would help students understand the framework of academic discipline constructing home economics and have a subjective view of home economics.

Key words: Home Economics Teacher Training, Curriculum, Subject Content,  
Clothing, Dietary and Living Life

キーワード：家庭科教員養成，カリキュラム，教科内容，衣・食・住生活

## 1. はじめに

広島大学教育学部人間生活系コースの家庭科教員養

成カリキュラムの再構想のために、その核となる一年次生対象科目「人間生活（家庭科）教育概論」の目的、方法および内容について、5年間（2015～2019年度）の検討、改善を行ってきた。その主たる課題は、家庭科の背景学問の理解に基づく教科観の明確化と、教科教

<sup>1</sup>広島大学名誉教授

育および教科専門担当者の実質的な連携であった。現時点では、生活課題を総合的・体系的に捉える視点が発現していること、自分自身の生活課題の解決に向けて科学的で具体的な方策を考える必要性に気付いていることなど、少なからず成果がみられている<sup>1)~4)</sup>。その要因として、学習の文脈やリアリティを意識させるために、企業のプロジェクトや地域活性化活動と連携し参画させたこと、パフォーマンス課題を設定して主体的な学びを促したこと、グループディスカッションや教員全員によるパネルディスカッションを通して、生活課題認識を広げられたことなどが考えられる。今後さらに、カリキュラム全体の再構想に向けて、教科専門科目の在り方を再考する必要がある。

中教審答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について」では、「教科に関する科目」の教科内容の見直しが課題として指摘された。しかし、そこでは各教科の学問的構造や特徴、指導内容についての学問的な理解が求められることが示されるにとどまった<sup>5)</sup>。教科の一つとして日本の小・中・高等学校の教育課程に位置づく家庭科の指導内容は、どのような学問を基盤に体系化されるべきなのか、その背景学問の核とされる家政学との関係については、未だ統一見解をみない。家政学は個別の専門諸科学の集合体ではないと言われながら、一方で、それらの専門諸科学の方法論や成果が家政学を発展させてきたともいえる<sup>6)</sup>。

いずれにしても、従来の家庭科の教科専門科目の問題点は、家庭科の意義や目標との関係において各専門諸科学が「再構成」された形で提供されず、専門諸科学とそれらを統合する位置にある家政学が意図されずに展開されてきた点にあると考えられる<sup>7)</sup>。専門諸科学の体系を、家政学の視点「家庭生活を中心とした人間生活における課題を、物的環境、精神的環境、身体的環境さらには社会的環境といった多様な視点」を組み込んで捉えることが、家庭科の学習内容の枠組みを再考することにつながり、さらには、コンピテンシー等汎用的資質・能力と家庭科の教科固有の資質・能力との関係を捉え直すことにもなる。

このような課題に着目し、2019年度入学生のカリキュラムから、教科専門科目「生活経営」「人間発達」「衣生活」「食生活」「住生活」の内容別に最初に提供する科目として「〇〇概論」を位置づけ、専門科目群を再構成した(図1)。各概論では、時代の変化やグローバル社会に対応できる自立した生活者としての生き方や家庭生活および人間生活環境の創造に関わる教育実践力を身に付けるとともに、家庭科教材、授業およびカリキュラムを創造する基盤となる専門性を養うことができるよう構想した。各概論の担当教員は、日本教

科内容学会において提案している家庭科内容構成の考え方<sup>5)</sup>を共有理念とし、家政学と当該専門諸科学との関係性を概念図として示すことによって、家庭科の背景学問の構造を理解させる方策をとった。また、「人間生活(家庭科)教育概論」と同様に、パフォーマンス課題を設定して主体的な学びを促し、体験活動やグループディスカッションを通して、関連の生活課題認識を広げられることを試みた。

本報では、2020年度前期に開講され、2019年度本コース入学生(二年度)19名が受講した「衣生活概論」、「食生活概論」および「住生活概論」の構想を解説するとともに、各概論受講前後の学生の生活観、教科観等の変容から、授業の成果と課題を明らかにすることを目的とした。

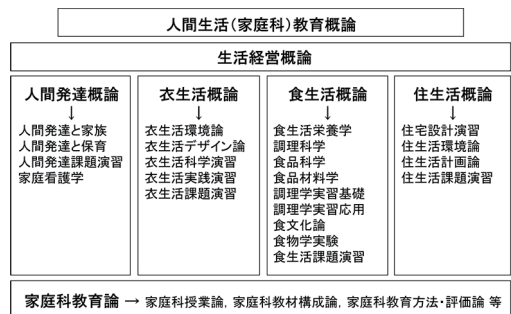


図1 家庭科教員養成科目群の再構想  
(広島大学人間生活系コース2019~)

## 2. 衣・食・住生活概論の授業構想と成果

### 2.1 「衣生活概論」

#### (1) 授業の構想意図と概要

「衣生活概論」の授業内容・展開を表1に示した。授業構想意図の詳細については、先行研究<sup>4)</sup>の通りである。今年度はコロナ禍の影響で、対面授業回数を最小限に抑えたため、15回分の授業をオンライン(第1~4回, 15回)と実習を主とした対面授業(第5~14回)に振り分けた。

第1回の授業では、図2「家政学と衣生活に関わる学問の関係性」を用いた。図中の○、△などの記号によって示した名称は、一般社団法人日本家政学会が専門分野の研究交流組織として設けている部会の名称である。授業ではこの図を用い、学習指導要領の内容を見ながら、衣服と人間との関係、また衣服を着装するという行為が、人間社会のなかでどのような価値を持ち、文化として確立され、歴史として継承されていくのか概説した。図2に示すように、衣生活を学ぶ上

表1 「衣生活概論」の授業計画

第1回	家庭科において衣生活について学ぶ意義、衣生活の現代的な課題を考える。パフォーマンス課題「子ども甚平とパンツを用いて、豊かな衣生活のあり方を考えてもらうイベントを企画、構想、発表する」を提示する。
第2回	被服の機能について理解を深め、自己の衣生活を振り返り、自己の衣生活に関する課題を整理する。
第3回	健康な衣生活、ライフサイクルと衣生活について、衣生活材料学、衣生活環境学、衣生活デザインの視点から考える。
第4回	衣生活における文化について考える。被服の構成(平面構成と立体構成)の視点から衣生活デザインを考え、日本の衣文化に対する理解を深める。
第5回	衣生活を支える技術について理解し、基礎縫いとミシン縫いの技能を習得する。
第6回	子ども用の甚平製作を行う。布の裁断工程から平面構成について考える。
第7回	甚平製作の縫製工程(衽付け、衿付け)を通じて、平面構成について考える。
第8回	ミシン縫いの技能を習得しながら、手縫いとの違いを理解する。
第9回	甚平製作の縫製工程(衿付け)を通じて、平面構成と立体構成の違いの理解を深める。
第10回	甚平製作の縫製工程を通じて、衣服と人体との関係について考える。
第11回	甚平製作の縫製工程(脇、裾)を通じて、平面構成と立体構成の違いの理解を深める。
第12回	甚平製作の縫製工程(紐付け)を通じて、平面構成の着装について深める。
第13回	子ども用のパンツ(甚平の下衣)製作の裁断、縫製工程を通じて、立体構成について理解を深める。
第14回	子ども用の甚平とパンツの製作工程を振り返り、健康な衣生活、ライフステージと衣生活について考え、縫製技能の習得を確認する。
第15回	パフォーマンス課題「子ども用甚平とパンツを用いて、豊かな衣生活のあり方を考えてもらうイベントを企画、構想、発表する」を実施。発表を通じて衣生活に関する課題解決のための探究力、創造力を習得する。製作課題とその製作記録を整理し、衣生活の課題解決に必要な知識と技能の定着をはかり、課題解決探究力につなげる。

するファイルとその工程写真を提示し、個々で模型を作成し実習に備えさせた。実習では製作に適した材料や縫い方を理解し、用具を安全かつ適切に取り扱うなど実践的な学びによって技能習得を目指した。実習中はずねに、パフォーマンス課題への取り組みを意識させるよう、図2に示す衣生活への視点に関わるキーワードを製作段階に応じて発するようになった。なお集団学習によって製作を進める過程では、学習者同士が学び合うことにより、製作の喜びを共有することができる。またそのときに得た達成感、学習者同士の交流により、さらに次の製作への意欲を高めることにつながる。以上のことから本授業においても、対面授業による製作実習を取り入れる意義は大きいと考える。第15回パフォーマンス課題の発表では、全員が他者の発表を聞き、そのイベントがさらに効果的になるアイデアを提示する課題を課した。本授業における評価は、製作した甚平、パンツに加え、手縫いによる基礎縫いの見本帳、甚平の紙模型といった製作物と、パフォーマンス課題の発表(そのレポートも含む)により行った。

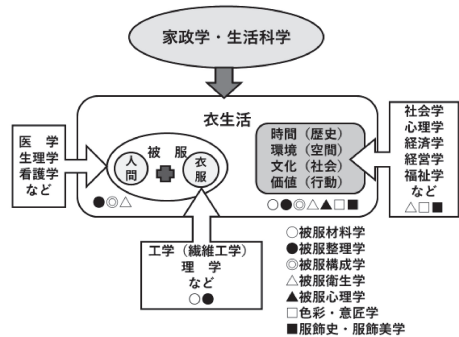


図2 家政学と衣生活に関わる学問の関係性<sup>8)</sup>

では、衣服、人間、それぞれが関わる事象、現象において基盤となる学問の存在を理解することが必要である。例えば、衣服の材料である布は、繊維→糸→布という工程を経て、人間がまとうよう形成させる。繊維を含む生活材料については、繊維工学、高分子化学など工学、理学が背景となる。しかし衣生活内容の専門書は、被服材料学、被服整理学という名称が用いられていることが多い。このことから、今後、学生が発展的に学習を行う際の参考資料の指針としても、衣生活における専門分野を提示し説明した。また衣生活について学ぶ意義を考える時間を設け、自らの衣生活を振り返らせ、最終課題としてのパフォーマンス課題を提示した。第2～4回では、衣生活課題を解決するために必要となる知識について理解が深まる内容とした。5回からの実習で製作する甚平の構成を理解するために、オンライン学習システムに甚平の紙模型作成に関

(2) 受講前後の調査結果の比較、分析

「衣生活概論」を受講するにあたり、高校までの家庭科の衣生活に関する学習およびこれまでの大学生生活や一年次のコース専門科目の学習を踏まえて、自分の衣生活に関する課題をイメージできたか、また受講後に自分の衣生活に関する課題を解決するために、どのような知識や技能が必要かイメージできたかについて、調査した。図3のように「衣生活概論」受講前には自分の衣生活の課題をあまりイメージできなかった受講生は、受講後はみられなくなった。また具体的に複数イメージできる受講生が3名(16%)から12名(63%)に増えた。

図4に、現代社会の衣生活の課題に対するイメージ、

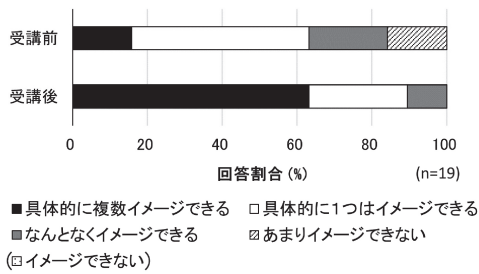


図3 自分の課題（受講前）と解決する知識と技能（受講後）に対するイメージ（衣生活）

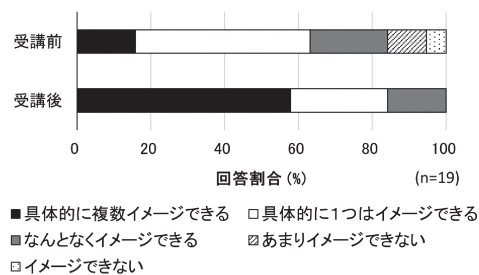


図4 社会の課題（受講前）と解決する知識と技能（受講後）に対するイメージ（衣生活）

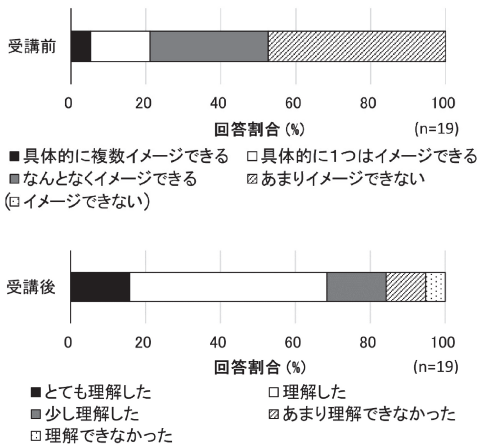


図5 「衣生活概論」に関連する学問に対するイメージ（受講前）と理解度（受講後）

またそれらを解決するために、どのような知識や技能が必要かイメージできたかを問うた結果を示す。自らの衣生活課題の場合と同様に、イメージできない、あまりイメージできなかった受講生が受講後にはみられ

なくなった。また具体的に複数イメージできる受講生も3名（16%）から11名（58%）に増えた。

以上の結果より、衣生活に関わる事象、現象に関する講義、実習を通じ、自らの衣生活だけでなく、現代社会における衣生活の課題に対する意識は高まったと考えられる。

図5に、一年次の教養科目やコース専門科目の学習を踏まえて、これから学ぶ「衣生活概論」に関連する学問をイメージできたか、また受講後にその学びにどのような学問が関連しているか理解できたかを問うた結果を示す。受講前に具体的にイメージできていた受講生は4名（21%）で、あまりイメージできなかった受講生は9名（47%）をしめた。受講後には、関連学問に対する理解を示した受講生は16名（84%）になったが、理解できなかった受講生も3名（16%）みられた。また、図示は割愛するが、「衣生活概論」での学びが家庭科の題材や授業の構想に役立つかイメージできるか（受講前・受講後）の回答結果では、全員がイメージできる（具体的に複数～なんとなく）と回答していた。

受講前に学問のイメージできていなかった受講生も、実習になると一つ一つの製作工程で、その意義を理解しようとしながら取り組んでいる者もみられた。それに対し、実習になると製作工程の意味を考えず、単なる作業として取り組む受講生もみられた。本コースでは実習を取り入れた内容が多いが、他の内容での実習時にどのような姿勢になるのか、講義と実習に対する取り組みの姿勢について個々に検証する必要性が示唆された。したがって、本調査においても個々の受講生の意識の変容について、さらに考察することが望ましい。

### (3) 次年度に向けての改善計画

今年度はコロナ禍への対策として、対面授業は三密を避けながら行ったため、実習は2クラスに分けて開講した。その結果個別指導が可能となり、その日の課題を持ち越す受講生はみられなかった。ミシン縫いの技能には差があり、完成までの時間的な余裕にも差がみられたが、全員が第14回に甚平、パンツを仕上げ、第15回にパフォーマンス課題の発表に臨むことができた。オンライン授業と実習の日が振り分けられたことで、受講生自身も時間を有効に使い、来学時に真剣に取り組む様子がみられた。2クラスによる少人数授業の効果がみられたことから、来年度も、オンラインと実習を併行した効果的な授業環境を取り入れたいと考えている。

## 2.2 「食生活概論」

### (1) 授業の構想意図と概要

「食生活概論」を構想するにあたり、家政学・生活科学と食生活の関係性および食生活に関わる学問体系について整理した(図6)。家政学や家庭科においては食生活を軸に栄養学、食品学、調理学の側面から追究し、その内容を捉えてきた。その学習内容の根底には、生物学、化学、物理学の概念が存在する。栄養学、食品学、調理学を柱に、公衆栄養学、食品衛生学、食文化など、食生活に関係する内容について、技能を含め学習していく。さらに食生活領域の学習内容の背景には農学、工学、理学などが存在し、人間と食べ物との相互作用においては、医歯薬学、解剖生理学、時間、空間、文化を含めると社会学、心理学、経済学、文化人類学などの学問領域が関与してくると考えられる。

議論の余地はあるが、食生活は人間の生命維持に関わる根源であるため、人間生活に関わるほぼ全ての学問領域が背景学問に存在すると考えられる。

「食生活概論」の授業シラバスを表2に示す。「食生活概論」の展開の特徴として、食生活について学ぶ意義、食生活の現代的な課題を捉え、問題解決的な学習過程の中で、課題解決のための探究力、創造力を修得させることをねらいとしている。15回の授業をステップ1(第1~4回)、ステップ2(第5~11回)、ステップ3(第12~15回)で構成した。受講生は、ステップ1でこれまでの食生活を振り返り、学ぶ意義、課題について考え、課題を解決するためには専門知識や技能が必要なことに気づく。次にステップ2でそれら必要な知識、技能について学び、ステップ3でそれらを活用しながら実践課題を遂行し、実践することにより新たな課題を見だし、次につなげる、という構成を考えた。

図6の家政学と食生活に関わる学問の関係性を踏ま

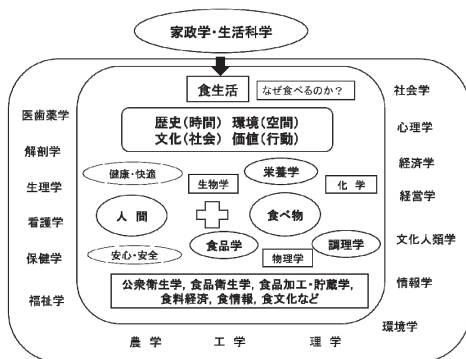


図6 家政学と食生活に関わる学問の関係性

表2 「食生活概論」の授業計画

第1回	中学校、高等学校時代に学習した家庭科の授業(食生活領域)について振り返り、印象に残っている内容(面白かった、興味ももてた、その逆など)について整理する。
第2回	食生活について学ぶ意義、食生活の現代的な課題をとらえ考える。食生活に関する実践課題(生活問題)を個人あるいはグループで設定する。
第3回	実践課題を実施・解決するための方法を検討する。
第4回	実践課題を実施・解決するために必要な知識・技術について整理する。
第5回	食生活(食品学・栄養学)の基礎を理解する(分子のかたち)。
第6回	食生活(食品学・栄養学)の基礎を理解する(五大栄養素)。
第7回	食生活(食品学・栄養学)の基礎を理解する(食生活と環境)。
第8回	食情報の収集方法を理解する。
第9回	食生活(調理学)の基礎を理解する(食文化・食事作法)。
第10回	食生活(調理学)の基礎を理解する(健康的で栄養バランスのとれた食事)。
第11回	食生活(調理学)の基礎を理解する(調理技能)。
第12回	食生活を科学的に理解したうえで設定した実践課題を見直し、再検討する。
第13回	作成した実践課題を遂行し、問題点・課題を見いだす。
第14回	実践を通じて把握した問題点・課題を整理し、新たな課題の解決方法を思索する。
第15回	試験を行う。食生活の課題解決に必要な知識と技能の定着を図り、課題解決探求力につなげる。

え、本授業は、基礎学問を生物学、化学、中心学問を栄養学、食品学、調理学とした。中・高等学校において、公衆衛生学、食品衛生学、食品加工・貯蔵学、食料経済、食情報、食文化などに関する内容も取り扱うが、それらを展開学問と捉えた。受講生が学ぶ意義、課題を見いだすまでは食生活領域担当2名の教員で授業を行い、受講生が考えた実践課題を共有しておく。ステップ1においては、栄養学、食品学、調理学を基盤とした振り返り活動が予想され、現代的課題、実践課題を設定する際にはグループあるいは個人において関与する内容が異なってくるのが考えられた。ステップ2においては、課題解決に必要な基本的な知識、技能を食品・栄養学担当教員、調理学担当教員により、説明していく。食生活の基礎の理解において、化学や生物学の概念も取り扱う。栄養学、食品学の基礎的な知識を学習した後に調理学関連領域において、知識を実生活に統合し、具体的な実践方法に関する知識、技能の理解につなげる。学んだ知識を踏まえて最初に立てた実践課題を再検討し、実践課題を遂行し、技能について理解を深める。実践後に問題点、課題を再抽出し、問題解決能力の育成につなげるシラバス構想とした。

しかしながら、2020年度は新型コロナウイルス感染

拡大防止のため、オンライン開講となりステップ1、ステップ3の対面によるグループ活動や実践活動が不可能であることが確定し、ステップ1に該当する内容を個人課題として提出させた。まず課題1として、中・高等学校で受けた家庭科の授業（食生活に関連する内容）で印象に残っているものとその理由について説明させるとともに受講生自身の食生活を振り返って、現在問題と考えていることおよびその理由、対応策について説明させた。課題2として、課題1で挙げられた課題を集約して示し、学生個人の課題に加え、興味ある課題を1課題追加した。そして、各課題について、実際に取り組む計画を考えさせ、その際に不足する知識や技能を説明させた。これら提出された課題をもとにステップ2の授業を必要に応じて、再構成して実施した。提出された課題内容が比較的類似した受講生を4名程度組み合わせさせてグルーピングし、ステップ3に関して、以下のようなグループワークを実施した。①グループメンバーの課題内容に対する見方・考え方の類似点および相違点、②課題の取り組み状況、③課題に取り組む上で難しかった点、挫折した点をまとめる。その後、④グループメンバーの課題内容や取り組む計画、取り組み状況をもとに実践したい取り組みあるいは難しかった点、挫折した点を改善できるような取り組みを決め、実践例を紹介する。①～④に関して、発表資料を作成・提出させ、グループごとに発表後、質疑応答を行うとともに発表内容全てに対して、受講生全員にコメントを記述させ、提出させた。個々人、各グループでグループワークへの取り組み意欲に差はみられたが、学生の視点で食生活に対する改善策および課題改善が困難な原因などを率直に発表した。教員側においても学生側の食生活の見方、考え方の理解につながった。

(2) 受講前後の調査結果の比較、分析

「食生活概論」を受講するにあたり、受講前調査を行った。結果を図7および8に示す。自分自身の食生活の課題や現代社会の食生活の課題を具体的に1つ以上イメージできる受講生は11名（58%）存在していた。なんとなくイメージできる受講生を合わせると9割以上が何らかの課題をイメージできていた。栄養バランスの偏り、間食過多、食料廃棄など、イメージの具体が授業実践におけるステップ1の課題内容に対応しており、これらの受講前調査がステップ1における課題の整理に役立ったのではないかと考えられた。受講後調査において、自分や現代社会の食生活の課題を解決するための知識や技能について、いずれも7割程度が具体的に複数イメージできたと回答しており、講義内容やグループワークおよびグループワークの共有がイ

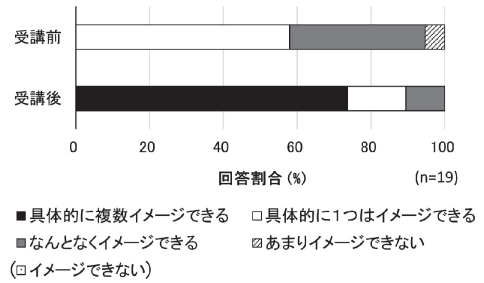


図7 自分の課題（受講前）と解決する知識と技能（受講後）に対するイメージ（食生活）

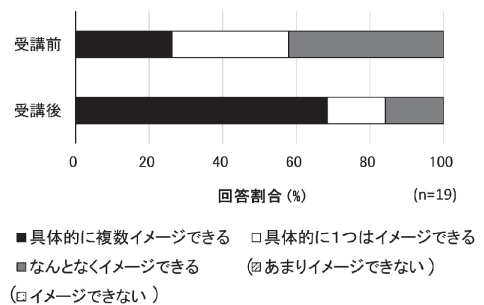


図8 社会の課題（受講前）と解決する知識と技能（受講後）に対するイメージ（食生活）

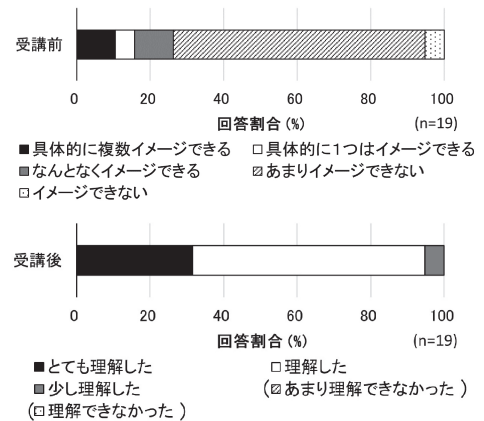


図9 「食生活概論」に関連する学問に対するイメージ（受講前）と理解度（受講後）

メージの具体に寄与したものと考えられた。「食生活概論」に関連する学問に対して、受講前調査においてはあまりイメージできないと回答した受講

生が13名（68％）と最も多かったが、受講後には9割の受講生が関連学問分野を理解したと回答した（図9）。その学問の具体については、背景学問までの広がりをもって回答する学生も存在する一方で、栄養学、調理学、食品学の柱学問を回答する学生も存在し、個々人の理解や関心に温度差があることが確認できた。1名を除き、「食生活概論」の受講生全員が受講により家庭科教育の意義を感じたとともに家庭科の題材や授業の構想に役立つことをイメージできたと回答した。

### (3) 次年度に向けての改善計画

コロナ禍により、シラバス通りの授業実践ができなかったが、受講生が挙げた食生活の課題を解決するための知識、技能について、基礎学問内容を含めステップ2の7回の時間で網羅的に説明するのは困難であると考えられた。一方で、学生自身が個人あるいはグループで具体的な解決方法を考える際の追究過程が必要な知識、技能を学習する機会になり得、教員はその解決のヒントを必要に応じて示す役割を担っていけばよいとも考えられた。加えて、本授業は同チームに「調理科学」、「調理学実習基礎」が併行して開講されるカリキュラム構成となっている。学生は調理学に関する専門知識や技術を同時に学習するため、それら学習内容と重複しない内容をステップ2で取り扱う方が適切とも考えられた。いずれにしても、次年度以降、対面による実践活動の効果を検証する必要がある。

## 2.3 「住生活概論」

### (1) 授業の構想意図と概要

「住生活概論」の授業計画を表3に示す。この授業の目標は「様々な問題を抱える現代の私たちの住まいや住生活について、具体的な考察を通して、その望ましいあり方を追求する」ことであるが、実情としては、学生の目を住生活に向けさせ、住生活を意識して生活させることが最大の目標となる。近年の学生の傾向として、自身の部屋やインテリアには興味があるものの、住居は与えられたものとして捉え、他者の生活との比較や新たな住環境を創造する力が乏しい。そもそも「住生活」とはどのようなものかを意識して生活していない学生もいるように感じられる。本コースの住生活内容領域の最初の授業であることから、まずは自身の住生活に目を向けさせ、今後の住生活内容領域の授業で学ぶ方向性を示すための授業として構想した。

「住生活概論」を構想するにあたり、図10に示す住生活に関わる学問の関係性を整理した。住生活の学習内容は住居学の学問領域の中から生成される。人と住まい・地域・地球との関わりの中で、住生活の仕組みを解明し、住生活の中で生じた問題を自然科学や社会科学の知見を駆使して究明し、個人的・社会的に解決

表3 「住生活概論」の授業計画

第1回	家庭科において住生活について学ぶ意義、住生活の現代的な課題を考える。住居学の概要と関連する学問領域について説明する。
第2回	住まいの役割と機能について、自身の生活を振り返りながら理解を深める。その中で多種多様な住生活があることを考える。
第3回	住まいと家族の生活との関わりについて理解を深める。家族の立場になって、住まいや住生活を考える。
第4回	住まいと地域生活との関わりについて理解を深める。地域の魅力と課題について考え、自身の住生活と地域との関わりを認識する。
第5回	住まいと住まい方について、ライフステージや他者との住生活を意識して、理解を深める。
第6回	住まいの安全について、家庭内で起こる事故や身近な危険について理解を深める。自身の生活における防犯・防災について考える。
第7回	住まいの環境として、光環境と音環境について理解を深める。自身の住生活の中での環境を振り返り、快適な光環境と音環境を考える。
第8回	住まいの環境として、熱環境と空気環境について理解を深める。自身の住生活の中での環境を振り返り、快適な熱環境と空気環境を考える。
第9回	住まいの計画として、自身が生活している住まいの間取りやその中にある建具・家具の寸法について考え、理解を深める。
第10回	住まいの設計として、簡単な集合住宅の平面図の作成を行う。製図法について理解を深める。
第11回	住まいの設計として、作成した集合住宅の平面図の中に、家具配置を行う。単位空間や家具の寸法について理解を深める。
第12回	住まいの維持・管理について、普段の生活で使用している住宅設備の仕組みについて理解を深める。
第13回	住まいと住様式として、日本の住まいの変遷や住様式の移り変わりについて理解を深める。
第14回	伝統的住宅を視察し、建物の構造、材料、環境などを実感する。当時の生活を考え、現代の住宅や住まい方と比較・考察する。
第15回	これまでの講義内容をまとめ、住生活の知識と技能を関連付けて、自身の生活自立、生活問題発見・生活問題解決、生活創造について考え、これからの住生活の質の向上を図る。

して生活の改善・向上・発展を図る。さらに、それを実現させるための手段・条件などを体系的に明らかにして、生活が安全、快適、文化的に行える空間を創造し、提供する。これらを目指す学問が住居学である。

その背景において、家政学・生活科学の中で、住生活は生活経営、消費、家族、乳幼児・高齢者、衣生活、食生活と密接に関係し、一方で住まいとなる躯体は建築物であり、建築学の構造・計画・環境の領域と関係する。そして、人と住まい・地域・地球の関係には、文化人類学、心理学、生理学、歴史学、地理学、工学、化学、物理学、医学、衛生学、環境学などの学問が関与している。

表3の授業計画のとおり、第1回で住生活を学ぶ意義、住生活の現代的な課題とともに、図10を示して住生活に関わる学問の関係性を説明する。第2回以降は住まいに関連するテーマを毎回設定し、自身の生活を振り返って、生活課題を考えるよう構成している。テーマとしては、「住まいの役割と機能」「家族」「地域」「住まい方」「安全」「環境」「計画」「設計」「維持・管理」「住様式」を設定している。それらの学びを踏まえ、第14回の授業で伝統的住宅の視察を通して、自身の現

代の生活と他者の過去の生活とを比較・考察する機会を設ける。ただし、2020年度は、コロナ禍の影響により、すべてオンライン形式の授業となったため、住まいの視察は実施できなかった。また、第7、8回の環境の内容では、簡単な実験や測定機器に触れる機会も想定していたが、自宅で行える内容（家庭での水・電気使用量の測定）に変更した。オンライン形式のため、自身の生活を考える内容の小レポートを提出させ、グループワークで、他者の意見を聞く機会を設けるように工夫した。また、提出された小レポートの内容を集計し、個人が特定されない形で他の受講生の住生活に関する考えや意見などを紹介した。評価はレポート課題とし、授業での学びを踏まえて、快適で安全に住まい・街で他者と生活するための気づきや課題を考察させた。

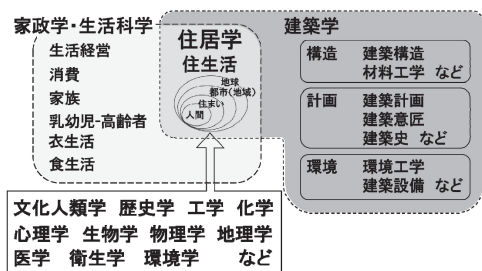


図10 家政学と住生活に関わる学問の関係性

(2) 受講前後の調査結果の比較、分析

受講生に、自分の住生活に関する課題をイメージできるか（受講前）、また課題解決のためにどのような知識と技能が必要かイメージできるか（受講後）を調査し、その結果を図11に示す。受講前では、イメージできる（具体的に複数～なんとなく）受講生が過半数いるものの、あまりイメージできない受講生も5名（26%）おり、「住生活」が意識できていない様子が見えてくる。しかしながら、受講後では、全員が課題解決のための知識や技能をイメージしており、13名（68%）の受講生は具体的に複数イメージしていることから、住生活に目を向け、課題を認識し、改善へのイメージがあることがわかる。

現代社会の住生活に関する課題（受講前）と課題解決のために必要な知識と技能（受講後）をイメージできるかの回答結果を図12に示す。受講前では5名（26%）の受講生がイメージできておらず、うち2名（11%）は自分の住生活課題（図11）も現代社会の住生活課題も「あまりイメージできない」と回答していた。他3名（16%）は自分の住生活課題をイメージできていたが、現代社会の住生活課題はイメージできて

いなかった。受講後では、全体的にイメージできる側への移行がみられたが、1名（5%）は受講前・受講後とも「あまりイメージできない」と回答していた。

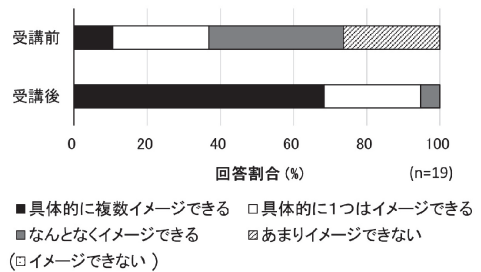


図11 自分の課題（受講前）と解決する知識と技能（受講後）に対するイメージ（住生活）

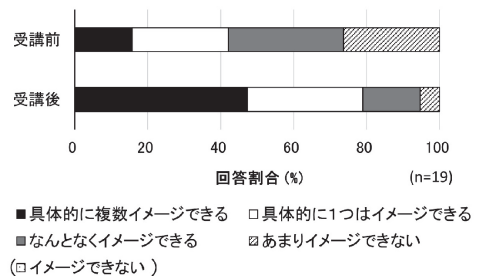


図12 社会の課題（受講前）と解決する知識と技能（受講後）に対するイメージ（住生活）

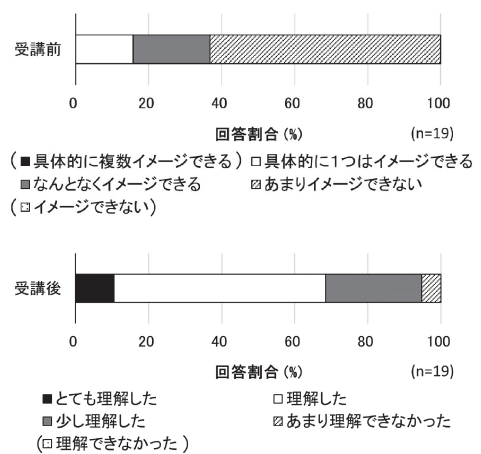


図13 「住生活概論」に関連する学問に対するイメージ（受講前）と理解度（受講後）



「住生活概論」に関連する学問をイメージ・理解できるかどうか（受講前・受講後）の回答結果を図13に示す。受講前では、半数以上の受講生が「あまりイメージできない」と回答している。そもそも「住生活概論」がどのような授業内容かをイメージできていないと思われるので、その関連学問がイメージできないのも想像に難くない。一方で、第1回の概要説明の中で、図10に示す住居学に関連する学問領域を提示し、住居学が、家政学や建築学、その他の学問領域と関連していることを説明している。そのため、受講後の調査で1名（5%）を除き、受講生が理解した（とても～少し）と回答したことは当然ともいえる。

また、「住生活概論」での学びが家庭科の題材や授業の構想に役立つかイメージできるか（受講前・受講後）の回答結果では、受講前は9名（47%）の受講生があまりイメージできていなかったが、受講後では1名（5%）を除き全員がイメージできる（具体的に複数～なんとなく）と回答していた。

### (3) 次年度に向けての改善計画

初めての授業が初めてのオンライン形式となり、授業担当者も受講生も試行錯誤しながら進めることとなったが、授業中でのグループワークなどで他者と意見交換し、自身の生活と他者の生活を比較・考察している様子が見ええた。また提出されたレポートの内容から、受講生は住まいや地域での自身の生活が、家族や地域の方などの他者との関係で成り立っていることへの気づきもみられた。

しかしながら受講後調査の結果より、学生の現代社会の住生活課題の把握について改善の余地がある。授業の中で、景観問題や地域生活での課題、防災・防犯などを取り入れて説明したが、より身近な地域での話題や事例を取り扱うよう改善を試みる。また、授業を通して、自身の住生活を振り返り、生活課題について考えることは全員が十分にできていたが、他者の生活を知り、比較・考察することは、必ずしも十分にできていない受講生も散見された。そのため、グループワークの機会を増やし、学生間の意見交換の場をバランス良く提供することが考えられる。

2020年度はオンライン形式での授業となったため、当初予定していた伝統的住宅の視察は実施できなかった。次年度にどのような授業形式になるかは現時点では不明であるが、伝統的住宅の視察ができない場合のために映像コンテンツなどを利用の可能性を検討する予定である。オンライン形式の授業を行ううえで、住生活内容領域の映像コンテンツ、オンラインで活用できる教材の乏しさも課題に感じられた。

## 3. まとめと今後の課題

2019年度入学生から改訂したカリキュラムにおける教科専門科目のうち、2020年度前期に開講された「衣生活概論」、「食生活概論」および「住生活概論」の構想を関連の学問体系とともに示し、各概論受講前後の学生の生活観、教科観等の変容を調査によって捉えた。また、授業者が捉えた授業の成果と課題に基づいて、次年度以降の各概論の改善の方向を探った。

3概論受講後の共通の成果として、次のことが挙げられる。

自分の生活課題を解決するために必要な知識や技能について、受講後には半数以上が複数イメージできるようになった。現代社会の生活課題についても、半数近くの受講生が複数イメージできるようになった。

関連学問のイメージについても、受講後には半数以上が「理解した」と回答した。しかしながら、上記の「課題を解決するために必要な知識や技能」と比較すると、「とても理解した」と回答した受講生が少なかった。

「食生活概論」および「住生活概論」では、生活課題の追究過程において、グループワーク（グループディスカッション）を行っており、それらの活動を通して、自分の考えを深めイメージを広げることができたと推察される。換言すれば、課題を見出し、解決策を探っていく過程を共有することによって、自分あるいは現代社会の課題への認識が多様になり、客観的に相対的に捉えられるようになってきていると考えられる。

「衣生活概論」および「住生活概論」では、生活課題の追究過程に体験活動を位置づけた。また、「衣生活概論」では最終的なパフォーマンス課題を常時意識させながら授業を進めた。これらの活動を通して、自ら課題を発見するとともに、それらを他者と共有することによって、自分と現代社会の問題点について主体的に捉える意義を理解し、今後のコースの専門科目の学びへの意欲が高まったと考えられる。

また、家政学と当該専門諸科学との関係性を概念図として示したことが、家庭科の背景学問の構造を理解させるために効果的であったかどうかについて言及することは難しいが、担当教員が概念図を意識して授業を行ったことによる効果は認められたと思われる。さらに、3概論に続いて受講することになる専門科目群において、関連学問およびそれらの関係性への理解を深める工夫が必要である。

さらに、ほとんどの学生が3概論の受講後に、家庭科教育の意義を感じていた。これは、同時期に「家庭科教材構成論」を受講し、家庭科の教科としての特徴を再考し、授業づくりを通して教材の意義を具体的に

認識したことが影響しているかもしれない。

今後は、本報告で明らかになった認識の実態を継続して捉えるとともに、個々の学生の変容を丁寧に追跡していくことが課題である。

一方、教科専門の授業と教科教育法関連の授業との関わり、各教科専門科目の科目群における背景学問の固有性に基づく内容の配列と関連性を考慮して、カリキュラム全体の改善を図っていくことも必要である。

## 【引用・参考文献】

- 1) 鈴木明子, 村上かおり, 福田明子, 木下瑞穂, 今川真治, 松原主典, 高田宏「家庭科教員養成におけるプログラムモデルの構築に向けて—教科教育と教科内容および教科内容相互の架橋の検討—」広島大学大学院教育学研究科紀要第二部第63号, 2014, pp.307-316
- 2) 鈴木明子, 村上かおり, 梶山曜子, 「家庭科教員養成における教科観の構築に関する研究—広島大学人間生活系コースにおけるカリキュラムの検討・改善をめぐる—」広島大学大学院教育学研究科紀要第二部第65号, 2016, pp.257-264
- 3) 鈴木明子, 村上かおり, 梶山曜子, 今川真治, 松原主典, 高田宏「広島大学人間生活系コースにおける家庭科教員養成カリキュラムの検討—教科観を育むガイダンス授業の構想—」広島大学大学院教育学

研究科紀要第二部第67号, 2018, pp.289-298

- 4) 村上かおり, 鈴木明子「広島大学人間生活系コースにおける家庭科教員養成カリキュラムの検討—家庭科内容学としての衣生活内容の構想—」広島大学大学院教育学研究科紀要第二部第67号, 2018, pp.299-308
- 5) 日本教科内容学会第7回研究大会(紙面開催)課題研究発表資料「家庭」の教科内容構成を基にしたシラバス提案と批評文 平田道憲・鈴木明子・村上かおり・富永美穂子 広島大学(人間生活教育学コース協力による)(批評)工藤由貴子・佐藤ゆかり(2020年8月7日)
- 6) 鈴木明子「連載コンピテンシーベースの授業づくり(8)家庭科の資質・能力育成におけるカリキュラム水準の文脈づくりの意義」(指導と評価, vol.63-3, 2017, pp.59-61)
- 7) 科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)課題番号19K02814(代表 鈴木明子)交付金によるシンポジウム資料(2019年10月20日)
- 8) 日本家政学会第71回大会(徳島・四国大学)ポスター発表資料(2019年5月25日)

## 【付記】

本研究は、JSPS 科研費 JP19K02814(代表者 鈴木明子)の助成を受けたものである。